

坂口安吾

不良少年とキリスト





# 不良少年とキリスト



もう十日、歯がいたい。右頬に氷をのせ、ズルフォン剤をのんで、ねている。ねていたくないのだが、氷をのせると、ねる以外に仕方がない。ねて本を読む。太宰の本をあらかた読みかえした。

ズルフォン剤を三箱カラにしたが、痛みがとまらない。是非なく、医者へ行つた。一向にハカバカしく行かない。「ハア、たいへん、よろしい。私の申上げることも、ズルフォン剤をのんで、ひょうのう氷嚢をあてる、それだけです。

それが何より、よろしい」

こっちは、それだけでは、よろしくないのである。

「今に、治るだろうと思います」

この若い医者には、完璧な言葉を用いる。今に、治るだろうと思いますか。医学は主観的認識の問題であるか、薬物の客観的効果の問題であるか。ともかく、こっちは、歯が痛いのだよ。

原子バクダンで百万人一瞬にたたきつぶしたって、たった一人の歯の痛みがとまらなきや、なにが文明だい。バカヤロー。

女房がズルフオン剤のガラスビンを縦に立てようとして、ガチャリと倒す。音響が、とびあがるほど、ひびくのである。

「コラ、バカ者！」

「このガラスビンは立てることができるとよ」

先方は、曲芸をたのしんでいるのである。

「オマエサンは、バカだから、キライだよ」

女房の血相が変わる。怒り、骨髄に徹したのである。こっちは痛み骨髄に徹している。

グサリと短刀を頬へつきさす。エイとえぐる。気持、

よきにあらずや。ノドにグリグリができています。そこが、うずく。耳が痛い。頭のシンも、電気のようにヒリヒリする。

クビをくくれ。悪魔を亡ぼせ。退治せよ。すすめ。まけるな。戦え。

かの三文文士は、歯痛によって、ついに、クビをくくって死せり。決死の血相、ものすごし。闘志充分なりき。偉大。

ほめて、くれねえだろうな。誰も。

歯が痛い、などということとは、目下、歯が痛い人間以



外は誰も同感してくれないのである。人間ボートク！と怒ったって、歯痛に対する不同感が人間ボートクかね。然らば、歯痛ボートク。いいじゃないですか。歯痛ぐらい。やれやれ。歯は、そんなものでしたか。新発見。

たった一人、銀座出版の升金編輯局長という珍妙な人物が、同情をよせてくれた。

「ウム、安吾さんよ。まさしく、歯は痛いもんじやよ。歯の病気と生殖器の病気は、同類項の陰鬱いんうつじや」  
うまいことを言う。まったく、陰にこもっている。し

てみれば、借金も同類項だろう。借金は陰鬱なる病気なり。不治の病いなり。これを退治せんとするも、人力の及ぶべからず。ああ、悲し、悲し。

歯痛をこらえて、ニツコリ、笑う。ちつとも、偉くねえや。このバカヤロー。

ああ、歯痛に泣く。蹴けとばすぞ。このバカ者。

歯は、何本あるか。これが、問題なんだ。人によって、歯の数が違うものだと思っていたら、そうじゃ、ないんだってね。変なところまで、似せやがるよ。そうまで、しなくったって、いいじゃないか。だからオレは、神様

が、きらいなんだ。なんだって、歯の数まで、同じにしやがるんだろう。気違いめ。まったくさ。そういうキチヨウメンなヤリカタは、気違いのものなんだ。もっと、素直に、なりやがれ。

歯痛をこらえて、ニツコリ、笑う。ニツコリ笑って、人を斬る。黙ってすわれれば、ピタリと、治る。オタスケじいさんだ。なるほど、信者が集るはずだ。

余は、歯痛によつて、十日間、カンシヤクを起こせり。女房は親切なりき。枕頭に侍り、カナダライに氷をいれ、はぐタオルをしぼり、五分間おきに余のホツペタにのせかえ

てくれたり。怒り骨髄に徹すれど、色にも見せず、貞淑、女大学なりき。

十日目。

「治った？」

「ウム。いくらか、治った」

女という動物が、何を考えているか、これは利巧な人間には、わからんよ。女房、とたんに血相変わり、

「十日間、私を、いじめたな」

余はブンナグラレ、蹴とばされたり。

ああ、余の死するや、女房とたんに血相変わり、一生

涯、私を、いじめたな、と余のナキガラをナグリ、クビをしめるべし。とたん、余、生きかえれば、おもしろし。

檀一雄、来たる。ふところより高価なるタバコをとりだし、貧乏するとゼイタクになる、タンマリお金があると、二十円の手巻きを買う、と呟つちやきつつ、余に一個くれたり。

「太宰が死にましたね。死んだから、葬式に行かなかつた」

死なない葬式が、あるもんか。

檀は太宰といっしよに共産党の細胞とやらいいう生物活動をしたことがあるのだ。そのとき太宰は、生物の親分格で、檀一雄の話によると一団中で最もマジメな黨員だったそうである。

「とびこんだ場所が自分のウチの近所だから、今度はほんとに死んだと思った」

檀仙人は神示をたれて、また、いわく、

「またイタズラしましたね。なにかしらイタズラするです。死んだ日が十三日、グッドバイが十三回目、なんとか、なんとかが、十三……」

檀仙人は十三をズラリと並べた。てんで気がついてい  
なかつたから、私は呆氣にとられた。仙人の眼力である。  
太宰の死は、誰より早く、私が知った。まだ新聞へで  
ないうちに、新潮の記者が知らせに来たのである。それ  
をきくと、私はただちに置き手紙を残して行くえをくら  
ました。新聞、雑誌が太宰のことで襲撃すると直覺に及  
んだからで、太宰のことは当分語りたくないから、と来  
訪の記者諸氏に宛て、書き残して、家をでたのである。  
これがマチガイの元であった。

新聞記者は私の置き手紙の日付が新聞記事よりも早い

ので、怪しんだのだ。太宰の自殺が狂言で、私が二人をかくまっていると思ったのである。

私も、はじめ、生きているのじゃないか、と思った。しかし、川つぶちに、ズリ落ちた跡がハッキリしていたときいたので、それではほんとうに死んだと思った。ズリ落ちた跡までイタズラはできない。新聞記者は拙者に弟子入りして探偵小説を勉強しろ。

新聞記者のカンチガイがほんとうであつたら、大いに、よかった。一年間ぐらい太宰を隠しておいて、ヒョイと生きかえらせたら、新聞記者や世の良識ある人々はカン



カンと怒るかshれないが、たまにはそんなことがあつても、いいではないか。ほんとうの自殺よりも、狂言自殺をたくらむだけのイタズラができたなら、太宰の文学はもつと傑すぐれたものになつたらうと私は思っている。

ブランデン氏は、日本の文学者どもと違って眼識ある人である。太宰の死にふれて（時事新報）文学者がメランコリイだけで死ぬのは例が少ない、たいがい虚弱から追いつめられるもので、太宰の場合も肺病が一因ではないか、という説であつた。

芥川も、そうだ。支那で感染した梅毒が、貴族趣味のこの人をふるえあがらせたことが思いやられる。

芥川や、太宰の苦悩に、もはや梅毒や肺病からの圧迫が慢性となつて、無自覚になつていたとしても、自殺へのコースをひらいた圧力の大きなものが、彼らの虚弱であつたことは本当だと私は思う。

太宰は、M・C、マイ・コメジアン、を自称しながら、どうしても、コメジアンになりきることが、できなかつた。

晩年のものでは、——どうも、いけない。彼は「晩年」

という小説を書いているもんで、こんぐらかって、いけないよ。その死に近きころの作品においては（舌がまわらんネ）「斜陽」が最もすぐれている。しかし十年前の「魚服記」（これぞ晩年の中にある）は、すばらしいじゃないか。これぞ、M・Cの作品です。「斜陽」も、ほぼ、M・Cだけでも、どうしてもM・Cになりきれなかったんだね。「父」だの「桜桃」だの、苦しいよ。あれを人に見せちゃア、いけないんだ。あれはフツカヨイの中にだけあり、フツカヨイの中で処理してしまわなければいけない性質のものだ。

フツカヨイの、もしくは、フツカヨイ的の、自責や追悔の苦しき、切なさを、文学の問題にしてもいけないし、人生の問題にしてもいけない。

死に近きころの太宰は、フツカヨイ的でありすぎた。毎日がいくらフツカヨイであるにしても、文学がフツカヨイじゃ、いけない。舞台にあがったM・Cにフツカヨイは許されないのだよ。覚醒剤をのみすぎ、心臓がバクハツしても、舞台の上のフツカヨイはくいどめなければいけない。

芥川は、ともかく、舞台の上で死んだ。死ぬ時も、ち

よツと、役者だった。太宰は、十三の数をひねくつたり、人間失格、グッドバイと時間をかけて筋をたて、筋書きどおりにやりながら、結局、舞台の上ではなく、フツカヨイ的に死んでしまった。

フツカヨイをとり去れば、太宰は健全にして整然たる常識人、つまり、マツトウの人間であった。小林秀雄が、そうである。太宰は小林の常識性を笑っていたが、それはマチガイである。真に正しく整然たる常識人でなければ、まことの文学は、書けるはずがない。

今年の一月何日だか、織田作之助の一周忌に酒をのん

だとき、織田夫人が二時間ほど、おくれて来た。その時までに一座は大いに酔っ払っていたが、誰か織田の何人かの隠していた女の話をはじめたので、

「そういう話は今のうちにやっつけてしまえ。織田夫人がきたら、やるんじゃないよ」

と私が言うと、

「そうだ、そうだ、ほんとうだ」

と、間髪を入れず、大声でアイツチを打ったのが太宰であった。先輩を訪問するに袴はかまをはき、太宰は、そういう男である。健全にして、整然たる、ほんとうの人間

であつた。

しかし、M・Cになれず、どうしてもフツカヨイ的になりがちであつた。

人間、生きながらえば恥多し。しかし、文学のM・Cには、人間の恥はあるが、フツカヨイの恥はない。

「斜陽」には、変な敬語が多すぎる。お弁当をお座敷にひろげて御持参のウイスキーをお飲みになり、といったグアイに、そうかと思うと、和田叔父が汽車にのると上キゲンに謡うたいをうなる、というように、いかにも貴族の月並な紋切型で、作者というものは、こんなところに文

学のまことの問題はないのだから平気なはずなのに、実に、フツカヨイ的に最も赤面するのが、こういうところなのである。

まったく、こんな赤面は無意味で、文学にとって、とるにも足らぬことだ。

ところが、志賀直哉という人物が、これを採りあげて、やツつける。つまり、志賀直哉なる人物が、いかに文学者でないか、単なる文章家にすぎん、ということが、これによって明らかなのであるが、ところが、これがまた、フツカヨイ的には最も急所をついたもので、太宰を赤面



混乱させ、逆上させたに相違ない。

もともと太宰は調子にのると、フツカヨイ的にすべつてしまふ男で、彼自身が、志賀直哉の「お殺し」という敬語が、体をなさんと云って、やツつける。

いったいに、こういうところには、太宰のいちばんかくしたい秘密があつた、と私は思う。

彼の小説には、初期のものから始めて、自分が良家の出であることが、書かれすぎている。

そのくせ、彼は、亀井勝一郎が何かの中でみずから名門の子弟を名乗ったら、ゲツ、名門、笑わせるな、名門

なんて、イヤな言葉、そう言ったが、なぜ、名門がおかしいのか、つまり太宰が、それにコダワツているのだ。名門のおかしさが、すぐ響くのだ。志賀直哉のお殺しも、それが彼にひびく意味があったのだろう。

フロイドに「ごびゆう誤謬の訂正」ということがある。我々が、つい言葉を言いまちがえたりすると、それを訂正する意味で、無意識のうちに類似のマチガイをやって、合理化しようとするものだ。

フツカヨイ的な衰弱的な心理には、特にこれがひどくなり、赤面逆上の混乱苦痛とともに、誤謬の訂正的発狂

状態が起こるものである。

太宰は、これを、文学の上でやった。

思うに太宰は、その若い時から、家出をして女の世話になつた時などに、良家の子弟、時には、華族の子弟ぐらいのところを、気取っていたこともあつたのだらう。その手で、飲み屋をだまして、借金を重ねたことも、あつたかもしれぬ。

フツカヨイ的に衰弱した心には、遠い一生のそれらの恥の数数が赤面逆上の彼を苦しめていたに相違ない。そして彼は、その小説で、誤謬の訂正をやらかした。フ

ロイドの誤謬の訂正とは、誤謬を素直に訂正することではなくて、もう一度、類似の誤謬を犯すことによって、訂正のツジツマを合わせようとする意味である。

けだし、率直な誤謬の訂正、つまり善なる建設への積極的な努力を、太宰はやらなかった。

彼は、やりたかったのだ。そのアコガレや、良識は、彼の言動にあふれていた。しかし、やれなかった。そこには、たしかに、虚弱の影響もある。しかし、虚弱に責を負わせるのは正理ではない。たしかに、彼が、安易であつたせいである。

M・Cになるには、フツカヨイを殺してかかる努力がいるが、フツカヨイの嘆きに溺れてしま<sup>おほ</sup>うには、努力が少なくてすむのだ。しかし、なぜ、安易であつたか、やっぱり、虚弱に帰するべきであるかも知れぬ。

むかし、太宰がニヤリと笑って田中英光に教訓をたれた。ファン・レターには、うるさがらずに、返事をかけよ、オトクイサマだからな。文学者も商人だよ。田中英光はこの教訓にしたがつて、せつせと返事を書くそうだが、太宰がせつせと返事を書いたか、あんまり書きもしなからう。

しかし、ともかく、太宰が相当ファンにサービスしていることは事実で、去年私のところへ金沢だかどこかの本屋のオヤジが、画帖（だか、どうだか、中をあけてみなかったが、相当厚みのあるものであった）を送ってよこして、一筆かいてくれという。包みをあけずに、ほつたらかしておいたら、時々サイソクがきて、そのうち、あれは非常に高価な紙をムリして買ったもので、もう何々さん、何々さん、何々さん、太宰さんも書いてくれた、余は汝坂口先生の人格を信用している、というような変なことが書いてあった。虫の居どころの悪い時で、

私も腹を立て、変なインネンをつけるな、バカ者め、と、包みをそっくり送り返したら、このキチガイめ、と怒った返事がきたことがあった。その時のハガキによると、太宰は絵をかいて、それに書を加えてやったようである。相当のサービスと申すべきであろう。これも、彼の虚弱から来ていることだろうと私は思っている。

いったいに、女優男優はとにかく、文学者とファン、ということとは、日本にも、外国にも、あんまり話題にならない。だいたい、現世的な俳優という仕事と違って、文学は歴史性のある仕事であるから、文学者の関心は、

現世的なものとは交わりが浅くなるのが当然で、ヴァレリイはじめ崇拜者にとりまかれていたというマラルメにしても、木曜会の漱石にしても、ファンというより門弟で、一応才能の資格が前提されたツナガリであつたらう。

太宰の場合は、そうではなく、映画ファンと同じよう  
で、こういうところは、芥川にも似たところがある。私  
はこれを彼らの肉体の虚弱からきたものと見るのであ  
る。

彼らの文学は本来孤独の文学で、現世的、ファンのな  
ものとツナガルところはないはずであるのに、つまり、



彼らは、舞台の上のM・Cになりきる強<sup>きょうじん</sup> 靱さが欠けていて、その弱さを現世的におぎなうようになったのだらうと私は思う。

結局は、それが、彼らを、死に追いやった。彼らが現世を突ツぱねていれば、彼らは、自殺はしなかった。自殺したかも、しれぬ。しかし、ともかく、もっと強靱なM・Cとなり、さらに傑れた作品を書いたであろう。

芥川にしても、太宰にしても、彼らの小説は、心理通、人間通の作品で、思想性はほとんどない。

虚無というものは、思想ではないのである。人間その

ものに付属した生理的な精神内容で、思想というものは、もつとバカな、オツチヨコチヨイなものだ。キリストは、思想でなく、人間そのものである。

人間性（虚無は人間性の付属品だ）は永遠不変のものであり、人間一般のものであるが、個人というものは、五十年しか生きられない人間で、その点で、唯一の特別な人間であり、人間一般と違う。思想とは、この個人に属するもので、だから、生き、また、亡びるものである。だから、元来、オツチヨコチヨイなのである。

思想とは、個人が、ともかく、自分の一生をたいせつ

に、よりよく生きようとして、くふうをこらし、必死にあみだした答えであるが、それだから、また、人間、死んでしまえば、それまでさ、アクセクするな、と言ってしまうえば、それまでだ。

太宰は悟りすまして、そう言いきることもできなかつた。そのくせ、よりよく生きるくふうをほどこし、青くさい思想を怖れず、バカになることは、なお、できなかつた。しかし、そう悟りすまして、冷然、人生を白眼視しても、ちツとも救われもせず、偉くもない。それを太宰は、イヤというほど、知っていたはずだ。

太宰のこういう「救われざる悲しさ」は、太宰ファンなどというものにはわからない。太宰ファンは、太宰が冷然、白眼視、青くさい思想や人間どもの悪アガキを冷笑して、フツカヨイ的な自虐作用を見せるたびに、カッサイしていたのである。

太宰はフツカヨイ的では、ありたくないと思い、もつともそれを咒<sup>のろ</sup>っていたはずだ。どんなに青くさくても構わない、幼稚でもいい、よりよく生きるために、世間的な善行でもなんでも、必死にくふうして、よい人間になりたかったはずだ。

それをさせなかつたものは、もろもろの彼の虚弱だ。

そして彼は現世のファンに迎合し、歴史の中のM・Cにならずに、ファンだけのためのM・Cになった。

「人間失格」「グツドバイ」「十三」なんて、いやらしい、ゲツ。他人がそれをやれば、太宰は必ず、そう言うはずではないか。

太宰が死にそこなつて、生きかえつたら、いずれはフツカヨイ的に赤面逆上、大混乱、苦悶のアゲク、「人間失格」「グツドバイ」自殺、イヤらしい、ゲツ、そういうものを書いたにきまっている。

太宰は、時々、ホンモノのM・Cになり、光りかがやくような作品をかいている。

「魚服記」、「斜陽」、その他、昔のものにも、いくつとなくあるが、近年のものでも、「男女同権」とか、「親友交歓」のような軽いものでも、立派なものだ。堂々、見あげたM・Cであり、歴史の中のM・Cぶりである。

けれども、それが持続ができず、どうしてもフツカヨイのM・Cになってしまう。そこから持ち直して、ホンモノのM・Cに、もどる。また、フツカヨイのM・Cに

もどる。それを繰り返かえしていたようだ。

しかし、そのたびに、語り方が巧くなり、よい語り手になっていく。文学の内容は変わっていない。それは彼が人間通の文学で、人間性の原本的な問題のみ取り扱っているから、思想的な生成変化が見られないのである。

今度も、自殺をせず、立ち直って、歴史の中のM・Cになりかえったなら、彼はさらに巧みな語り手となって、美しい物語をサービスしたはずであった。

だいたい、フツカヨイ的自虐作用は、わかりやすいものだから、深刻すぎな青年のカツサイを博すのは当然

であるが、太宰ほどの高い孤独な魂が、フツカヨイの M・C にひきずられがちであったのは、虚弱の致すところ、また、ひとつ、酒の致すところであつたと私は思う。

ブランデン氏は虚弱を見破つたが、私は、もう一つ、酒、このきわめて通俗な魔物をつけ加える。

太宰の晩年はフツカヨイ的であつたが、また、実際に、フツカヨイという通俗きわまるものが、彼の高い孤独な魂をむしばんでいたのだらうと思う。

酒はほとんど中毒を起こさない。先日、さる精神病医の話によると、特に日本には真性アル中というものはほ



とんどない由である。

けれども、酒を麻薬にあらず、料理の一種と思ったら、大マチガイですよ。

酒は、うまいもんじやないです。僕はどんなウイスキーでもコニヤックでも、イキを殺して、ようやく呑み下しているのだ。酔っ払うために、のんでいるです。酔うと、ねむれます。これも効用のひとつ。

しかし、酒をのむと、否、酔っ払うと、忘れます。いや、別の人間に誕生します。もしも、自分というものが、忘れる必要がなかったら、何も、こんなものを、私はの

みたくない。

自分を忘れたい、ウソつけ。忘れたきや、年中、酒をのんで、酔い通せ。これをデカダンと称す。屁理窟を言っってはならぬ。

私は生きているのだぜ。さっきも言うとおりに、人生五十年、タカが知れてらア、そう言うのが、あんまりやさしいから、そう言いたくないと言ってるじゃないか。幼稚でも、青くさくても、泥くさくても、なんとか生きているアカシを立てようと心がけているのだ。年じゅう酔い通すぐらいなら、死んでらい。

一時的に自分を忘れられるということは、これは魅力あることですよ。たしかに、これは、現実的に偉大なる魔術です。むかしは、金五十銭、ギザギザ一枚にぎると、新橋の駅前で、コップ酒五杯のんで、魔術がつかえた。

ちかごろは、魔法をつかうのは、容易なことじゃ、ないですよ。太宰は、魔法つかいに失格せずに、人間に失格したです。と、思いこみ遊ばしたです。

もとより、太宰は、人間に失格しては、いない。フツカヨイに赤面逆上するだけでも、赤面逆上しないヤツバラよりも、どれぐらい、マツトウに、人間的であったか

しれぬ。

小説が書けなくなつたわけでもない。ちよつと、一時的に、M・Cになりきる力が衰えただけのことだ。

太宰は、たしかに、ある種の人々にとっては、つきあいにくい人間であつたろう。

たとえば、太宰は私に向かつて、文学界の同人になつちやつたが、あれ、どうしたら、いいかね、と言うから、いいじゃないか、そんなこと、ほつたらかしておくがいいさ。アア、そうだ、そうだ、とよろこぶ。

そのあとで、人に向かつて、坂口安吾にこうわざとシヨ

ゲて見せたら、案の定、大先輩ぶって、ポンと胸をたたかんばかりに、いいじゃないか、ほッたらかしとけ、だつてさ、などとおもしろおかしく言いかねない男なのである。

多くの旧友は、太宰のこの式の手に、太宰をイヤがつて離れたりしたが、むろんこの手で友人たちは傷つけられたに相違ないが、実際は、太宰自身が、わが手によって、内々さらに傷つき、赤面逆上したはずである。

もとより、これらは、彼自身がその作中にも言っているとおおり、現に眼前の人へのサービスに、ふと、言っ

しまっただけのことだ。それぐらいのことは、同様に作家たる友人連、知らないはずはないが、そうと知っても不快と思う人々は彼から離れたわけだろう。

しかし、太宰の内々の赤面逆上、自卑、その苦痛は、ひどかったはずだ。その点、彼は信頼に足る誠実漢であり、健全な、人間であったのだ。

だから、太宰は、座談では、ふと、このサービスをやらかして、内々赤面逆上に及ぶわけだが、それを文章に書いてはおらぬ。ところが、太宰の弟子の田中英光となると、座談も文学も区別なしに、これをやらかしており、

そのあとで、内々どころか、大ツピラに、赤面混乱逆上などと書きとばして、それで当人救われた気持だから、助からない。

太宰は、そうではなかった。もっと、ほんとうに、つましく、敬虔けいけんで、誠実であったのである。それだけ、内々の赤面逆上は、ひどかったはずだ。

そういう自卑に人一倍苦しむ太宰に、酒の魔法は必需品であったのが当然だ。しかし、酒の魔術には、フツカヨイという香かんばしからぬ付属品があるから、こまる。火に油だ。

料理用の酒には、フツカヨイはないのであるが、魔術用の酒には、これがある。精神の衰弱期に、魔術を用いると、淫<sup>いん</sup>しがちであり、ええ、ままよ、死んでもいいやと思いがちで、最も強烈な自覚症状としては、もう仕事もできなくなつた、文学もイヤになつた、これが、自分の本音のように思われる。実際は、フツカヨイの幻想で、そして、病的な幻想以外に、もう仕事ができない、という絶体絶命の場は、實在致してはおらぬ。

太宰のような人間通、いろいろ知りぬいた人間でも、こんな俗なことを思いあやまる。ムリはないよ。酒は、



魔術なのだから。俗でも、浅薄でも、敵が魔術だから、知っていても、人智は及ばぬ。ローレライです。

太宰は、悲し。ローレライに、してやられました。

情死だなんて、大ウソだよ。魔術使いは、酒の中で、女にほれるばかり。酒の中にいるのは、当人でなくて、別の人間だ。別の人間が惚れたって、当人は、知らないよ。

第一、ほんとに惚れて、死ぬなんて、ナンセンスさ。惚れたら、生きることです。

太宰の遺書は、体をなしていない。メチャメチャに酔

っ払っていたようだ。十三日に死ぬことは、あるいは、内々考えていたかもしれぬ。ともかく、「人間失格」、「グッドバイ」、それで自殺、まあ、それとなく筋は立てておいたのだろう。内々筋は立ててあっても、必ず死なねばならぬはずでもない。必ず死なねばならぬ、そのような絶体絶命の思想とか、絶体絶命の場というものが、實在するものではないのである。

彼のフツカヨイ的衰弱が、内々の筋を、しだいにノツピキならないものにしたのだろう。

しかし、スタコラ・サツちゃんが、イヤだと言えば、

実現はするはずがない。太宰がメチャメチャに酔って、言いだして、サツちゃんが、それを決定的にしたのである。

サツちゃんも、大酒飲みの由であるが、その遺書は、尊敬する先生のお伴をさせていたただくのは身にあまる幸福です、というような整ったもので、いっこうに酔った跡はない。しかし、太宰の遺書は、書体も文章も体をなしておらず、途方もない御酩酊めいていに相違なく、これが自殺でなければ、アレ、ゆうべは、あんなことをやったかと、フツカヨイの赤面逆上があるところだが、自殺とあ

つては、翌朝、目がさめないから、ダメである。

太宰の遺書は、体をなしていなすぎる。太宰の死にちかいころの文章が、フツカヨイ的であつても、ともかく、現世を相手のM・Cであつたことは、たしかだ。もつとも、「如是我聞」の最終回（四回目か）は、ひどい。ここにも、M・Cは、ほとんどいない。あるものは、グチである。こういうものを書くことによつて、彼の内々の赤面逆上はますますひどくなり、彼の精神は消耗して、ひとり、生きぐるしく、切なかつたであろうと思う。しかし、彼がM・Cでなくなるほど、身近の者からカツサ

イが起こり、その愚かさを知りながら、ウンザリしつつ、カツサイの人々をめあてに、それに合わせて行ったらしい。その点では、彼は最後まで、M・Cではあった。彼をとりまく最もせまいサークルを相手に。

彼の遺書には、そのせまいサークル相手のM・Cすらもない。

子供が凡人でもカンベンしてやってくれ、という。奥さんには、あなたがキライで死ぬんじやありません、とある。井伏さんは悪人です、とある。

そこにあるものは、泥酔の騒々しさばかりで、まった

く、M・Cは、おらぬ。

だが、子供が凡人でも、カンベンしてやってくれ、とは、切ない。凡人でない子供が、彼はどんなにほしかったろうか。凡人でも、わが子が、哀れなのだ。それで、いいではないか。太宰は、そういう、あたりまえの人間だ。彼の小説は、彼がまっとうな人間、小さな善良な健全な整った人間であることを承知して、読まねばならないものである。

しかし、子供をただ憐れあわんでくれ、とは言わずに、特に凡人だから、と言っているところに、太宰の一生をつ

らぬく切なさの鍵もあつたらう。つまり、彼は、非凡に憑つかれた類の少い見栄坊でもあつた。その見栄坊自体、通俗で常識的なものであるが、志賀直哉に対する「如是我聞」のグチの中でも、このことはバクロしている。

宮様が、身につまされて愛読した、それだけでいいではないか、と太宰は志賀直哉にくツてかかっているのであるが、日ごろのM・Cのすぐれた技術を忘れると、彼は通俗そのものである。それでいいのだ。通俗で、常識的でなくて、どうして小説が書けようぞ。太宰が終生、ついに、この一事に気づかず、妙なカツサイに合わせて

フツカヨイの自虐作用をやっていたのが、その大成をばんだのである。

くりかえして言う。通俗、常識そのものでなければ、すぐれた文学は書けるはずがないのだ。太宰は通俗、常識のまっとうな典型的人間でありながら、ついに、その自覚をもつことができなかつた。

人間をわりきろうなんて、ムリだ。特別、ひどいのは、子供というヤツだ。ヒョッコリ、生れてきやがる。

不思議に、私には、子供がない。ヒョッコリ生まれか



けたことが、二度あったが、死んで生まれたり、生まれて、とたんに死んだりした。おかげで、私は、いまだに、助かっているのである。

全然無意識のうちに、変テコリンに腹がふくらんだりして、にわかには、その気になったり、親みたいになくなって、そんなふうにして、人間が生まれ、育つのだから、バカらしい。

人間は、決して、親の子ではない。キリストと同じように、みんな牛小屋か便所の中かなんかに生まれているのである。

親がなくとも、子が育つ。ウソです。

親があっても、子が育つんだ。親なんて、バカな奴が、人間づらして、親づらして、腹がふくれて、にわか慌てて、親らしくなりやがったできそこないが、動物とも人間ともつかない変テコリンな憐れみをかけて、陰にこもって子供を育てやがる。親がなきや、子供は、もっと、立派に育つよ。

太宰という男は、親兄弟、家庭というものに、いためつけられた妙チキリンな不良少年であった。

生まれが、どうだ、と、つまらんことばかり、言っ

やがる。強迫観念である。そのアゲク、奴は、ほんとうに、華族の子供、天皇の子供かなんかであればいい、と内々思つて。そういうクダラン夢想が、奴の内々の人生であつた。

太宰は親とか兄とか、先輩、長老というと、もう頭が上らるのである。だから、それをヤツツケなければならぬ。口惜しいのである。しかし、ふるいついて泣きたいぐらい、愛情をもっているのである。こういうところは、不良少年の典型的な心理であつた。

彼は、四十になつても、まだ不良少年で、不良青年に

も、不良老年にもなれない男であった。

不良少年は負けたくないのである。なんとかして、偉く見せたい。クビをくくつて、死んでも、偉く見せたい。宮様か天皇の子供でありたいように、死んでも、偉く見せたい。四十になっても、太宰の内々の心理は、それだけの不良少年の心理で、そのアサハ力なことをほんとうにやりやがったから、むちやくちやな奴だ。

文学者の死、そんなもんじやない。四十になっても、不良少年だった妙テコリンのできそこないが、千々に乱れて、とうとう、やりやがったのである。

まったく、笑わせる奴だ。先輩を訪れる、先輩と称し、ハオリ袴で、やってきやがる。不良少年の仁義である。礼儀正しい。そして、天皇の子供みたいに、日本一、礼儀正しいツモリでいやる。

芥川は太宰よりも、もっと大人のような、利巧のような顔をして、そして、秀才で、おとなしくて、ウブらしかったが、実際は、同じ不良少年であった。二重人格で、もう一つの人格は、ふところにドスをのんで縁日かなんかぶらつき、小娘を脅迫、口説いていたのである。

文学者、もっと、ひどいのは、哲学者、笑わせるな。

哲学。なにが、哲学だい。なんでもありやしないじゃないか。思索ときやがる。

ヘーゲル、西田幾多郎、なんだい、バカバカしい。六十になっても、人間なんて、不良少年、それだけのことじゃないか。大人ぶるない。冥想めいそうときやがる。

何を冥想していたか。不良少年の冥想と、哲学者の冥想と、どこに違いがあるのか。持って廻っているだけ、大人の方が、バカなテーマがかかっているだけじゃないか。

芥川も、太宰も、不良少年の自殺であった。

不良少年の中でも、特別、弱虫、泣き虫小僧であった

のである。腕力じゃ、勝てない。理窟でも、勝てない。そこで、何か、ひきあいを出して、その権威によって、自己主張をする。芥川も、太宰も、キリストをひきあいに出した。弱虫の泣き虫小僧の不良少年の手である。

ドストエフスキーとなると、不良少年でも、ガキ大将の腕ツ節があった。奴ぐらいの腕ツ節になると、キリストだの何だのヒキアイに出さぬ。自分がキリストになる。キリストをこしらえやがる。まったく、とうとう、こしらえやがった。アリョーシャという、死の直前に、ようやく、まにあつた。そこまでは、シリメツレッツであつた。

不良少年は、シリメツレツだ。

死ぬ、とか、自殺、とか、くだらぬことだ。負けたから、死ぬのである。勝てば、死にはせぬ。死の勝利、そんなバカな論理を信じるのは、オタスケじいさんの虫きりを信じるよりも阿呆らしい。

人間は生きることが、全部である。死ねば、なくなる。名声だの、芸術は長し、バカバカしい。私は、ユーレイはキライだよ。死んでも、生きてるなんて、そんなユーレイはキライだよ。

生きることだけが、だいじである、ということ。たっ



たこれだけのことが、わかっていない。ほんとうは、わかるとか、わからんという問題じゃない。生きるか、死ぬか、二つしか、ありやせぬ。おまけに、死ぬ方は、ただなくなるだけで、何もないだけのことじゃないか。生きてみせ、やりぬいてみせ、戦いぬいてみなければならぬ。いつでも、死ぬる。そんな、つまらんことをやるな。いつでもできることなんか、やるもんじゃないよ。

死ぬ時は、ただ無に帰するのみであるという、このツツマシイ人間のまことの義務に忠実でなければならぬ。私は、これを、人間の義務とみるのである。生きている

だけが、人間で、あとは、ただ白骨、否、無である。そして、ただ、生きることのみを知ることによって、正義、真実が、生まれる。生と死を論ずる宗教だの哲学などに、正義も、真理もありはせぬ。あれは、オモチャだ。

しかし、生きていると、疲れるね。かく言う私も、時に、無に帰そうと思う時があるですよ。戦いぬく、言うはやすく、疲れるね。しかし、度胸は、きめている。是が非でも、生きる時間を、生きぬくよ。そして、戦うよ。決して、負けぬ。負けぬとは、戦う、ということですよ。それ以外に、勝負など、ありやせぬ。戦っていれば、

負けないのです。決して、勝てないのです。人間は、決して、勝ちません。ただ、負けないのだ。

勝とうなんて、思っちゃ、いけない。勝てるはずが、ないじゃないか。誰に、何者に、勝つつもりなんだ。

時間というものを、無限と見ては、いけないのである。そんな大ゲサな、子供の夢みたいなことを、本気に考えてはいけない。時間というものは、自分が生れてから、死ぬまでの間です。

大ゲサすぎたのだ。限度。学問とは、限度の発見にあるのだよ。大ゲサなのは、子供の夢で、学問じゃない

のです。

原子バクダンを発見するのは、学問じゃないのです。子供の遊びです。これをコントローラし、適度に利用し、戦争などせず、平和な秩序を考え、そういう限度を発見するのが、学問なんです。

自殺は、学問じゃないよ。子供の遊びです。はじめから、まず、限度を知っていることが、必要なのだ。

私はこの戦争のおかげで、原子バクダンは学問じゃない、子供の遊びは学問じゃない、戦争も学問じゃない、ということをお教えされた。大ゲサなものを、買いかぶつ

ていたのだ。

学問は、限度の発見だ。私は、そのために戦う。



日本文学電子図書館

---

墮落論

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店  
昭和45年1月30日 改版3刷

---



日本文学電子図書館